

ても遠國の窮郷にては、煙管なしに、竹筒の口へ煙草を入れて吸ふものあり、

〔烟草百首〕紀州熊野路の土人は、今にきせるを用ひず、薜の葉（オウゴン）などを巻て、其中へたばこを盛て吸、

〔鶯録中〕煙具諸圖雜載

阪昌周藏、本邦創製烟管圖、慶長元和際所用云、



〔めざまし草〕羽州山形民間に得る所、二百餘年前の鐵煙管、長曲五尺、重五十目、一寸八

按に慶長私記西鶴本に出る、皮袴組等の男達、下部に持せたるといふも、斯の如き煙管なるべし、

○皮袴組ノ事ハ、烟草篇禁制ノ條ニ在リ、

〔續五元集下〕寶永元年

念なう早うどれなりとよべ

戀

袖の香も四寸のきせる錦かう

〔好色二代男〕敵なしの花軍

一夜阿波座の東南側のまがきに、○中松屋町焼の土火入に、（そりわん）反腕の貰入、取集めたる鍍金煙管片

手に、客の文を寄合讀に譏る、○下

〔賤のをだ巻〕一きせるも品々流行たり、されども大抵今もかはらず、京都の櫻ばりのみ、萬代不易

の形にて、その比もおとなしき人は用ひたりしが、今もかはらず、又流行もせず、其外品々新作、い

づれとも大同小異にて、さして目立たるもなし、まかしながら、昔は打のべのきせるを、持者十人

晋子